MACF 礼拝説教要旨
2024 年 6 月 30 日

「神と共に歩んだエノク」

ヘブライ人への手紙 11 章 5-6 節
5 信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。
神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、
神に喜ばれていたことが証明されていたからです。
6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、
神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに
報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです。

創世記 5 章
18 イエレドは百六十二歳になったとき、エノクをもうけた。
19 イエレドは、エノクが生まれた後八百年生きて、息子や娘をもうけた。
20 イエレドは九百六十二年生き、そして死んだ。
21 エノクは六十五歳になったとき、メトシェラをもうけた。
22 エノクは、メトシェラが生まれた後、三百年神と共に歩み、息子や娘をもうけた。
23 エノクは三百六十五年生きた。
24 エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。

＊＊
先週はアベルとカインについて、それぞれの信仰姿勢を検討しました。
今週は「エノク」の信仰とその生き方について考えます。エノクという人が登場するのは
創世記 5 章です。ここにはアダムの系図が書かれています。特徴的なのは子供が生まれた時の年齢と
その後何年生きたのか、そして死んだということが明確に記録されています。
現代人の私たちにはこの人たちの寿命は長すぎるように感じます。しかし、そう書いてあるので
あえてそのことについては触れずにいきます。

さて、エノクです。私たちの友人の牧師に「エノク」先生がいます。素晴らしい名前です。
意味は「献げられたもの」「従うもの」です。
旧約聖書に出てくるエノクの父エレドは謙遜な人で自分の息子を神に献げ、つまり神から預けられた
息子と理解して息子を神に託し、献げつつ生きたのです。

エノクはこの系図の中ではとても重大な変化をもたらしています。その他の全ての人は死んで
いるのですが、エノクは死んでいないからです。

ヘブライ人への手紙 11 章では
5 信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。
神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、
神に喜ばれていたことが証明されていたからです。
とあり、
創世記では
22 エノクは、メトシェラが生まれた後、三百年神と共に歩み、息子や娘をもうけた。
23 エノクは三百六十五年生きた。
24 エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。

いくつか考えてみたいと思います。
ヘブライ人への手紙では「エノクは神に喜ばれていた」とあり、
創世記では「エノクは神と共に歩み」と書かれています。

1）死と裁きの厳粛さ
エノクは 65 歳で息子を得、その子をメトシェラと名付けます。この名前の意味は
「死」（ムート）を「遣わす」（シャーラハ）というもので、この子の死の先に
神の裁きがあることを預言している名前だと言われています。
ここではノアの大洪水があるわけです。
この近くのもとで、エノクは自らの生き方を再確認し、神と共に歩む姿勢を
確立していったのではないかと言われています。

ヘブライ人への手紙 9 章 27 節には
「人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」とあり、生きていて死ぬまでの
間、神と共に歩むか、神を喜びながら歩むか、それとも
自分勝手に奔放に歩むかによって、その先が大きく変わっていくことを示しています。
エノクはまさに、そのことに気づいたのです。
そして真剣に神を目の前に置いて生きる姿勢を始めたのです

2）神に喜ばれる生き方

エノクの生き方は「神に喜ばれる生き方」と言われ、「神と共に歩んだ」と
書かれています。これはどういう生き方なのでしょう。
これは自発的に「神との親密な交わり、関係性」を求めつつ生きるという
ことと合致しているように思います。

「神と共に歩む」場合、私たちに必要なのは「神との和解」であり、
神の心や思いを知らせていただきながら生きるという学び、従う生き方に

通じています。共に歩むとき、足並みは横並びか後ろからになるように
思います。決して神を追い越さないのです。つまり、良かれと思って
行き過ぎなことをしないこともまた神と共に歩むために必要な意識でしょう。

そして神に喜ばれる信仰をもって関わっていたということになるでしょう。
それは「神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方である」ということをどんな場面でもしっかり心に留めつつ生きる姿勢を意味しています。

「神も仏もあるものか」と言いたくなるような現状のなかでも「いや、神様はおられて
全てを治めておられる」と確信し、最終的に私たちの存在、生き方をそっくり
受け止めてくださると信頼しながら生きること。
「これをする、あれができる」ということで神を喜ばせようとするのではなく
私の存在全体が神の御手の中に置かれていることを心から感謝し、喜び
それを土台にみ言葉に学び、社会の中で生きる時、神様の喜ばれる生き方に
なっていくのでしょうね。
それは極めて体験的なものであり、日々の日常的な生き方そのものがものをいう
世界です。日々の積み重ねの中で神への信頼をさらに深めつつ生きるのです。

私たちのできることは小さなことです。でも、その小さなことを愛に溢れて
喜んで参画する時、双方に喜びが生まれます。

神様はあなたの存在を喜んでおられます。その喜びを受けて、私たちは
神様に親しみ、信頼し従っていくのです。

3)「神が取られる」という生き方

エノクの生涯はその系図の中ではとても短いものでした。
でも、エノクは満ち足りていたのだと思います。
そして、神様は大喜びでエノクを近くに呼び出したかったのだと
思います。直接、霊的な世界に招き入れたかったのだと思います。
そこにあるのは「裁きではなく交わり」です。

私たちにとっての死が「裁き」ではなく「神との交わり」なのだ、神が
呼んでくださったのだとうなずいて迎えられたらなんと幸いなことでしょう。

＊＊
MACF 礼拝映像はこちらです。
https://youtu.be/O8DIdgbUIS8